

元・内閣総理大臣

中曾根

NAKASONE
Yasuhiro

康弘さんに伺いました

聞き手

藤井 聡

学会誌編集幹事長
東京工業大学大学院教授

土木のあるべき姿を考えるにあたり「政治」という視点は欠くことができない重大なる要素である。「新しい土木のかたち」を特集にて問う本号の「この人に聞く」では、新春特別インタビューとして、戦後日本の国のかたちに重大な影響を与え続けてこられた中曾根康弘 元・内閣総理大臣に、土木、国土、そしてあるべき国家像について縦横に論じていただいた。

稲の文化と土木

——先生はかつて、旧建設省の前身の内務省におられたということですが、まずは内務省時代の土木の印象などお聞かせいただけませんか。

中曾根——私は1941(昭和16)年に東大を出て内務省に入ったのですが、内務省にいたのは1週間、あとは海軍へ行き、連合艦隊に配属されて戦争へ行きました。終戦になると内務省にまた復帰、そのときはGHQとの連絡官をやり、警視庁監察官等を担当した後、代議士に立候補して政治家になりました。ですから当時は、内務省の土木系とは特に関係はなかったのです。ただし昔は、国土計画とか土木事業というのが政治であり、内務省は政治の事務的中心だった。だから、私としては、内務省にいたのは政治の見習いをやってきたんだと考えています。——つまり、政治と土木は昔から深いつながりがあった、と。

中曾根——昔は政治というと土木事業でした。要するに建設事業ですね。

——建設事業といいますが、たとえば川を補修し、道路やダムをつくり国土を形づくっていくものですが、まずは、「わが国の国土」につきましてお話を聞かせていただけませんか。

中曾根——日本はアジアの東で、日本海と太平洋が波打つ間の大八洲オホヤシマの列島構造で、非常に稠密な生活体系をつくってきました。外国に本土を侵略されたという経験もなく、2千年の歴史の間に大和民族が結集され、独特の文化を形成してきました。そこで重要なのが和の精神。これは聖徳太子の十七条憲法からきているけれども、それが政治の中核のイデオロギーとして流れていました。そのため、平和で寛大な精神を日本人はもっていたとともに、異文化を吸収するという力もまた非常に強かった。つまり、日本人の精神には多元性があったのです。——たとえば、砂漠の国土ですと砂だらけ。一方、

日本の国土はモンスーン地帯であり、森と岩清水があった。日本の多元性は、やはりそういったところとも関係するのでしょうか。

中曾根——日本はモンスーン地帯にあって、稲の文化というものを築き上げてきたんですよ。豊葦原トヨアシハラの瑞穂みずほの国というのは、やはり稲と関係しています。大陸にあるような狩猟文化とは違い、小ぢんまりとした濃密な文化。われわれの生活の原型というのは足利時代にできました。だけど、文化的なものというのが構成されたのはやはり徳川時代でしょうね。

——そういった日本の文化が歴史のなかで少しずつかたちを変えつつ現代に至っている、その歴史のなかでいまの日本というのは、どういう方向に向かっているのでしょうか。

中曾根——それを考えるには、一つには、やはり制度としての天皇制の変遷を考えてみることにですね。天皇はこの列島に内在している八百万の神、各地方にある神社の総元締めとしての神



中曽根康弘(なかそね・やすひろ)

1918年生まれ。89歳。東京帝国大学法学部卒業。内務省入省と同時に海軍へ。1947年、群馬から衆議院議員へ。連続20回当選、56年にわたり国会議員を務める。その間、科学技術庁長官、運輸大臣、防衛庁長官、通産大臣、行管庁長官、自民党の要職を歴任。1982年から1987年まで内閣総理大臣。現在、(財)世界平和研究所会長。

主。だから、昔の天皇は外国の元首は皆持つて
いる軍刀ではなく、「笏」をお持ちになつていまし
た。これは、天皇が「文の代表」であることを意
味しているんですね。それが明治になって、外来
文明を入れなくてはというので、伊藤博文がプ
ロシア憲法を真似て天皇制をつくりました。そ
の時に天皇が「軍刀」をお持ちになつたわけです。
しかし、これが敗戦によって軍刀の代わりに「顕
微鏡」をお持ちになった。こうした変遷が、各時
代の変遷を象徴しているわけです。

政治は土木なり

——そのような変遷を経たわが国の文化ですが、

そうしたわが国固有の文化のなかでの土木、これ
についてお話を聞かせただけでないでしょうか。
中曽根——政治というのは土木であつて、まず
道をつくることでしょうかね。それから、井戸を
掘つて、水道や池をつくり、海岸に漁港をつく
る、これらはみな土木ですよ。昔、政治の主
題は土木でした。

ただし、国のかたちを考へるにはやはり精神
的な面も大きいでしょう。日本は古事記、日本
書紀以来の、日本精神というようなものをずつ
と維持してきた。それは非常に大らかな多元性
を認めるもので、平和的な思想。だから、フラン
ス革命みたいな、大きな内乱というのは日本の
歴史にはありません。もちろん、戦国時代とい

うものはあつた。だけど、戦国時代でも、信長に
しても秀吉にしても武力統一して京都に上がつ
て天皇から太政大臣や征夷大將軍に任命され
る、それが目標でした。そういう意味において、
(フランス革命のような)国家に対する反乱はな
かつたのです。

こうした思想は、大八洲の中での稠密な生活、
そういうことからきています。ひと言でそれを言
うなら、それは「稲の文明」。手足を使って、歩い
て、背中にしよつて、生活体系を築いてきました。
——稲の文明が日本にあるとすると、その重要な
事業が治水であつたり、水を引く利水であつたり。
日本の古来の土木というのは日本の文明を支え
てきた一つの土台であつたと。

中曽根——稲の文明ですからね。水路とか、あ
るいは田んぼの畦あぜづくりとかね。用水とかみん
な土木です。だから、政治とは土木である、と
あえて言つてもいいでしょう。

——稲を支えてきたのも土木であり、近代国会を
支えてきたのも土木でした。そして、軍刀を持つ
た明治天皇を横から支えたのも土木であつたとい
うこともいえるのかもしれないね。

中曽根——やはり、封建時代、各藩主、仕事で
も、藩ごとに土木中心でやっていますよね。池を
つくつたりね。水路をつくるとかね。耕地整理
をやるとかね。あるいは森林を開拓して、水田
を広げるとかね。そういう仕事を中心でした。

(以下、21ページに続く)